

ところざわの暮らし今昔

お蚕さまとの暮らし

蚕を飼って繭を作る仕事を養蚕といい、所沢市内でもかつては盛んに行われました。春蚕・秋蚕・晩秋蚕と年3回飼う家が多く、盛んな時代には、夏蚕と晩秋蚕を加えて年5回飼う家もあったほどです。

繭の売り上げは貴重な収入であり、蚕は「お蚕さま」と呼ばれて大切に扱われました。農家では、毎年春になると座敷の畳を上げて蚕の棚を組み、飼育の準備を始めます。そして、タネ(蚕の卵)が孵化すると、これを四角い竹籠に紙を敷いた上へ載せ、棚にさして飼育したのです。

蚕の食事は新鮮な桑の葉です。小さいうちは包丁で葉を細かく刻み、大きくなると丸葉のまま与えました。蚕は、4回の脱皮を繰り返しながら一齢から五齢まで成長し、それに伴って食欲も旺盛になります。成長した蚕が一斉に桑の葉を食べる音は、まるで雨音のようでした。

五齢となって7~10日を過ぎると、蚕は繭を作り始めます。体が暗色を帯びて頭をもたげ、繭を作る兆候を見せ始めることをヒキルといい、この状態の蚕をヒキゴと呼びます。



▲ヒキゴにヒキゴは、マブシと呼ばれる

「繭作りの家」に移され、ここで糸を吐きながら真っ白い繭を作るのです。

北野や三ヶ島では7月20日~23日に、山口や久米では7月31日~8月3日に、お盆を行う風習があります。これは蚕が盛んな時代、飼育の日程にあわせてお盆の日取りを調整したためです。

現在、所沢市内で養蚕を行う家は、上新井に1軒、北野に9軒、三ヶ島に3軒、林に1軒の計14軒を残すのみとなりました。(宮本)



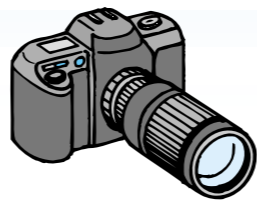
▲マブシで繭を作る



▲並木保育園の園児たちが「七夕飾り」の製作に励んでいる様子。七夕飾り(紙の鳥)の製作の様子。6月30日(木)~7月7日(木) 市役所1階・市民ホール



▲自然観察園で飼育されているホタル。幻想的な美しい光を放っていました。「ホタル鑑賞会」。(撮影/市民カメラマン・松崎 満) 6月16日(木)・17日(金) 市内幼稚園自然観察園



街の写真館



▲今年が初披露の「ゆり園」。約3万㎡の自然林に25万株40種のゆりが華やかに咲き競いました。(撮影/市民カメラマン・西山元博) 6・7月/自然散策園「ゆり園」

はつらつと 野老 子

~自然の中で安らぎを感じて~

石井 弘さん(狭山ヶ丘在住)



『カヌーを川に浮かべて、のんびりと下ったことがありますか?』。ここでは、日常とは全く違う世界を味わうことが…。自然と親しむ家庭で育った石井さんは、カヌー競技の元日本チャンピオン。世界選手権などへの出場経験もあり、アジアでは第2位の実力者。数々の国体では、埼玉県総合優勝にも貢献しました。カヌーとの出会いは大学生のとき。「カヌーは生涯を通してできるスポーツ」と思い、1年間の独学後、オリンピックに出場した師匠のもとで技術を磨き、輝かしい成績を収めたのです。

▲小学校でのカヌー教室



選手としての活躍後は、国から認定を受けた専任コーチとして国体強化選手の指導や日本代表監督を務め、多くの選手を優勝に導き、指導者としての高い評価も得ました。そして、このときが、石井さんの転機となったのです。「我々指導者は資質が高い選手だけに時間と労力と費用を費やし

ます。しかし、自分は本当にこれでよいのかと疑問を感じたのです。このきっかけとなったのが、知的障害児へのカヌー指導でした。気持ちが伝わらず、これまでの指導の自信が揺らいだそうです。しかし、子どもたちを信じて任せてみると、カヌーの乗り方等を互いに教え合う光景を目にしました。「指導とはするものではなく、自発的な子どもたちの意欲を助けてあげるもの。できるという可能性を信じ、だれにでも経験する機会を平等に提供すること」と教えられたそうです。現在、福井大学でカヌーを通してスポーツ科学を教える一方、長野県の野尻湖では、所有のクラブハウスで親子が楽しめる機会を提供しています。また、2年前から始めた市内小学校でのカヌー教室では、子どもたちが創造、工夫、集中することで経験を積み、感性のすばらしい人間になるようにと願いながら指導しています。「人間は経験をすることで脳を発達させ、磨きかけます。そして、成熟すると人のために何か役に立とうと考えるのです」と語ります。「カヌーに乗ると自然の中で安らぎを感じ、心がいやされます。人生にも、そんな気分を味わう時間が必要なのでしょう。

とこところ 町内会めぐり

【山口地区・岩崎上町自治会】 ~地域の発展と親睦~

岩崎上町自治会は、住みよいまちづくり、ふれあいの輪を目指して、日々活動を続けています。

毎月第3日曜日に、地域の皆さんの参加による町内清掃等の環境美化活動を実施しています。8月には、自治会館敷地内に子どもの広場、舞台(檜)、太鼓、夜店等を設けて、夏祭り納涼大会を開催しています。大勢の参加者で盛り上がり、友情の輪が広がります。

また、子ども会、婦人会、長生クラブ等、地域の団体育成にも努めています。

このほか、岩崎地域には昭和44年6月に市の無形民俗文化財に指定され、貴重な郷土芸能として称賛されている岩崎獅子舞があります。この獅子舞は、かつて「岩崎のシシクルイ」といわれ、3人の舞手が頭に獅子頭をかぶり、腹に太鼓をくくりつけ撥で打ちながら、笛と鼈の音に合わせて舞い踊るものです。慶長19年(1614)の大坂冬の陣の際に、岩崎の地頭であった宇佐美助右衛門が京都で獅子頭面を求めて持ち帰り、瑞岩寺再建の折に舞ったのが始まりといわれています。



▲岩崎獅子舞

現在でも、毎年10月に瑞岩寺境内で行われ、これまで地区の長男だけであったのを広く後継者を育成して、保存に努めています。

これからも地域の方々の協力により、地域の発展と親睦を図っていきます。

夏は暑いと身任せ 下富・細川 春夫
仕事上、朝帰りのときがある。今までは、2、3時間も休められも取れていた。しかし今は、特に夏場になると無理せず、睡眠時間を長く取るようにしている。食事をして、新聞に目を通し、午後の窓を開け、自然の風を入れ、横になる。温暖化の影響か、私たちの子どもたちの暑さとは質が違ってくる。暑くなる。雷が遠くに聞こえ、やがて空が暗くなる。以前は、「サッ」と一雨きたあとに、「スー」と冷たい涼気がきたものだった。暑いからといって、冷たい部屋に冷たい飲み物ではなく、「うちわに熱いお茶」と、体を冷やさないようにしている。多くの睡眠時間に加え、なるべく熱を通した食事を取り、自然に逆らわず日々を過ごす。平凡だが、これが私の夏はて対策である。

煩忙の効 並木・谷口 新吾
高温多湿の夏。深夜の冷気を待つ。必然的に、夜ふかしに朝寝坊。こんなことも、若かりしころは、冗談を言って笑い飛ばし、気力とあふれる体力のお陰で、なんてことはなかった。四十路を過ぎて、胃は、怠惰、エアコン依存などがわずかに出現した。「対策を講じなければ無為のときを過ごしてしまう」と、焦りと悔しさが募る。しかし、思いをしたら、偶然か縁あってか、寸暇も惜しむ程の課題を抱える暇に陥った。灼熱の中で、日課ならぬ「夜課」に取り組み夏の日々。しかし、夜課を終えるのは子刻か、もしくは丑寅の刻。時がよろしく、屋外からは冷気が差し入る。肉は過度に疲れ、あとは深い眠りにつくばかり。為すことありて、はて暇なき。

涼しい風を感じて 日吉町・麻生 カツ
わが家は、窓や戸を開け、換気をこまめにすることで、一日中、涼しい風が部屋の中を通り抜けてくれます。庭のくちなしの花が満開で、良い香りを一面に漂わせしてくれます。狭い庭では、ふっせんかつら、朝顔などの草花が、「おしくらこんべ」をしているようです。花の一枝を切つてきて、風がよく通る。抜ける部屋でお茶を飲みながら、下手でもその花の絵を描くことが、楽しみのひとつになっています。さうすることで、夏は「を感じる」こともなく、過さずい

誰でてもイ

テーマ 夏ばて対策

次回のテーマは「プレゼント」です ▶「誰でもイッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「プレゼント」▶締め切りは8月8日(月)必着▶送り先：〒359-8501 並木1-1-1 所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係 ◎Eメール (アドレスa9024@city.tokorozawa.saitama.jp) も可。

